日本医史学雑誌第四十一巻第一号
平成七年三月二十日発行
平成六年五月二十七日受付

マルシリオ・フィチーノの健康論

伊藤和行

一、序

マルシリオ・フィチーノ（Marsilio Ficino, 1433-99）は医学史ではあまり知られていないが、イタリア・ルネサンスにおいて最も重要な哲学者である。中世ヨーロッパ思想の中心がアリストテレス哲学を中心としたスコラ哲学であったのに対し、ルネサンス思想を特徴づけているのはプラトン哲学だった。中世においては『ティマイオス』を除いてはほとんど知られていなかったプラトンの著作をラテン語に翻訳し、ヨーロッパ世界に紹介したのがフィチーノに他ならない。彼の哲学の核心は、主著『プラトン神学』の表題にも示されているように、プラトン哲学に基づいてキリスト教神学を構築することである。その理論的中心である「プラトン的愛」の概念は十六世紀の哲学のみならず、文学、芸術といった広範な文化領域に大きな影響を及ぼしている(1)。

このようにフィチーノは哲学者として活躍したが、彼が大学で学んだのは医学だった。彼は、ルネサンス文化の中心地だったフィレンツェの支配者コジモ・デ・メディチの侍医の息子として生まれ、父親の職を継ぐためにボローニャ大学・フィレンツェ大学で医学を学んだのである。しかし彼の才能に目を付けたコジモによって、プラトンなどの著作の

翻訳をすることを命じられたため、医者として活動することはなかった。しかし医学はフィチーノ自身にとって哲学に劣らず重要な研究対象であった。彼は二つの医学書、『生について』(De vita, 1489) と『ペストに対する助言』(Consilio contro la pestilenzia, 1481) を著している。[2] 両者とも大きな反響を呼んだが、特に前者は多くの版を重ね、諸外国語にも翻訳された。『生について』は、第一巻「健康な生について」(De vita sana)、第二巻「長い生について」(De vita longa)、第三巻「天上的な生を得ることについて」(De vita coelitus comparanda) からなる。最初の二巻は学者や知識人の健康維持を論じているのに対して、第三巻は占星術的医学に関する哲学的な考察に向けられている。第三巻はルネサンスの魔術思想に大きな影響を与えたことが知られているが、学者と老人の健康法を論じた第一巻と第二巻も養生書として当時高い評価を得ていた。彼の健康論は、中世において多く著されていた養生書と同様に、ガレノスの四体液説に基づいたものであるが、黒胆汁の概念には彼の独自性が現れている。

本稿では、彼の議論の前提となっている中世における健康論を検討した上で、第一巻における学者の健康論を、黒胆汁の概念を中心に考察する。

二、中世の養生書と体液説

中世およびルネサンスを通じて医学理論の基礎を提供したガレノスは『健康を保持することについて』(De sanitate tuenda) の序論において、医学は二つの基本的部分からなることを主張している。すなわち健康を保持するための養生法と病気を癒すための治療法である。[3] アヴィセンナもこのことを強調し、『医学範典』(Canon medicinae) の冒頭の「医学の定義」において「医学とは、健康であるときと、健康でないときにおける人間身体の様々な状態を知る学問である。それによって健康が維持され、また健康が失われたときには回復されるのである。[4]」と述べている。彼らに倣った中世の医学者にとっても養生法は重要な医学分野であった。

中世には多くの養生書が書かれたが、最も流布したものは『サレルノ健康規則』(Regimen sanitatis salernitanum) と『健康一覧表』(Tacuinum sanitatis) である。『サレルノ健康規則』は、中世で最初の医学校があったといわれるサレルノで十三世紀頃に纏められ、数百行におよぶ詩の形式で書かれている。その内容は理論書というよりも実用書的なものであって、扱われている題材も食物や薬品の他、生活習慣などの医学に関わることすべてに及んでいる。[5]『健康一覧表』は表題の通り、様々な食物の効用や生活上の注意を図解を用いて説明したもので、中世後期の手稿には非常に美しい彩色画の挿絵が付け加えられている。[6] 両者とも養生法と治療法も明確には区分されておらず、体系性はみられないが、当時の医学上の経験的知識がよく反映されている。

これらの実践的養生書に理論的基盤を提供していたのはガレノスの病理論だった。多くの『健康一覧表』では、健康を維持するための「六つの必要なこと」が最初に説明されている。すなわち、

一、心臓に関わる空気の取り扱い
二、食物と飲み物の正しい使用
三、運動と休息の正しい適用
四、過度の睡眠あるいは不眠からの身体の保護
五、体液の排泄と保持の正しい使用
六、節度ある喜び、怒り、恐れ、不安による人格を適切に保つこと

健康維持の基本はこれらの要因を適切な均衡状態に保つことにある。なぜなら、この均衡がくずれることによって病気が生じるからである。また従って治療とはこの均衡を復活させることに他ならない。[7]

これら「六つの必要なこと」とは、中世では「六つの非自然的な事物」(sex res non-naturales) として知られ、その起源はガレノスの『医術』(Ars medica) にあることが知られている。[8] この著作においてガレノスは、医学を健康な状態

と不健康な状態、そしてそれらどちらでもない中間の状態に関する学問と定義する。これら三つの状態を保持する必然的な原因として、周囲の空気、運動と安静、睡眠と覚醒、飲食されるもの、排泄されるものと保持されるもの、感情という六つのものを挙げている。ガレノス自身は「六つの非自然的な事物」という言葉を用いていないが、中世においては、ガレノスに基づいてアラビア語で書かれた医学書がラテン語に翻訳される際に導入され、以後広範に用いられていた。例えば中世の代表的教科書であるヨハンニティウス（フナイ・イブン・イスハーク）の『イサゴーゲー』（『ガレノス医学入門』Isagoge ad Tegni Galeni）では、「非自然的な事物」として、空気の変化、身体の運動、入浴、食物、飲物、睡眠、性交、魂の状態が挙げられている。(9)

これらの「六つの非自然的な事物」が疾病を引き起こすのは、身体の四つの基本的性質の均衡を変化させ、体液の特性や体液の均衡に影響を及ぼすことによる。ガレノスの四体液説によれば、身体は血液、粘液、胆汁、黒胆汁からなり、それらのどれかが増加・減少して均衡が失われた状態が疾病に他ならない。これら四体液はすべての物質を形成する四元素、さらにはその基盤である四性質とも密接な関係を持つ。

血液――空気―温と湿―春―幼年期
胆汁――火――温と乾―夏―青年期
粘液――水――冷と湿―秋―壮年期
黒胆汁―土――冷と乾―冬―老年期

これらの体液の均衡が、どれか一つの体液の過剰や腐敗によって失われるときに病気が生じるのであるから、医師の務めは、有害なものを瀉血や下剤、他の薬剤を用いて患者の体内から排出させ、体液の均衡を復活させることにある。

さらにこれら四つの体液の混合の割合は個人によって異なり、各人において生来支配的な体液がその人間の性格を規定している。すなわち多血質、胆汁質、黒胆汁質、粘液質という四つの気質が各体液に対応する。とくに黒胆汁質は憂

鬱質とも呼ばれ、憂鬱さらには「神聖病」と呼ばれた癲癇の原因とみなされていた。[10]

中世の養生書における理論的部分は、以上のような体液論によって具体的な処方や規則を説明することに向けられることになる。フィチーノの『生について』もまた体液論の考察から具体的な方策へと議論が進められている。

三、フィチーノの「健康な生について」

フィチーノの『生について』の第一巻「健康な生について」は二七の章から構成され、最初の十章では体液説に基づく医学理論的考察が行われ、後半では具体的な処方が説明されている。前半部分の理論的考察の核心は、四体液の中でも粘液と黒胆汁が文人や学者において支配的であることにある。両者とも身体の他の部分では不活発であるが、脳と精神では活発であるので、知的活動に携わる学者では両者の影響が大きいのである。そして両者の過剰は文人を不健康にする原因となるので、それらが過剰になることに対して注意せねばならない。粘液の過剰は「推知をしばしば鈍らせ働かなくさせる」のに対し、とくに黒胆汁の過剰は文人を「絶え間ない煩労と頻繁な妄想によって精神を苦しめ判断を混乱させ」、憂鬱にしたり時には気が触れるようにする。[11] 文人はその活動から憂鬱質になりやすい、すなわち黒胆汁の支配を受けやすいのである。

古代ギリシアのヒッポクラテスの時代から、黒胆汁が憂鬱質を導くという考えは認められていたものであり、中世においては憂鬱質すなわち「メランコリア」(melancholia) とは体液の一つとともに、その体液から生じる病気を意味していた。しかし才知に秀でた者では黒胆汁が支配的であるという考えが生まれ、学者や芸術家の活動に結びつけられるようになったのはルネサンスに入ってからである。フィチーノによれば、黒胆汁によって引き起こされる狂気こそ「神聖な狂気」(furor divinus) という天才的な活動に不可欠な精神的状態なのである。この考えは、後にミケランジェロやデューラーらの芸術家の作品のテーマにもなっている。[12]

しかしこの黒胆汁の両義性、人間を才知に秀でさせるとともに憂鬱に導くという相矛盾する二つの特性はいかにして説明されるのか。このためにフィチーノは二種類の黒胆汁を導入する。

「憂鬱質すなわち黒胆汁には二つのものがあり、一方は医者によって自然的なものと呼ばれ、他方は燃焼から生じるものである。自然的なものは血液の濃密で乾燥した部分に他ならない。それに対して燃焼によるものは四つの種類に分けられる。というのは、それは、自然的な憂鬱質やより純粋な［より濃密でない］血液、胆汁、塩分を含む粘液の燃焼から生じるからである。燃焼から生じるものはどれもが洞察と英知を害する。[13]」自然的な黒胆汁のみが才知を導くが、それも常にとは限らない。なぜなら濃密な黒胆汁のみでは余りに冷たいために精神的活動をかえって抑制するからである。よって胆汁や血液と混じることによって希薄化され温められることが必要である。黒胆汁は胆汁や血液と適当な仕方で混合されたときには、一度火がつくと長く激しく燃え、そして長く続く激しい熱からは巨大な輝きと長く続く激しい運動、すなわち才知ある精神的活動が生まれる。[14]

さらにフィチーノは「いかにして黒胆汁が才知を導くか」(Quo pacto atra biiis conducat ingenio) という核心へと進む。才知を生み出すのは、黒胆汁、胆汁、血液という三つの体液が適切に混合した「体液体」から生じる「スピリトゥス」である。

「この体液から生じるスピリトゥスは、生命の水あるいは活力の水、燃える水と呼ばれる水と同じように微細であり、一般に行われているようにその水は濃密なワインから火による蒸留でもって抽出されるのである。というのはこのような黒胆汁の濃縮されたスピリトゥスはいっそう狭い通路では圧縮の激しい熱によって非常に微細になる。その狭い通路を通って押し出されてきたときには極めて希薄になっている。第二に同様に熱くなり同じだけ光り輝く。第三に運動が活発であって作用は非常に激しい。第四に堅固で確固とした体液から絶えず流出するので非常に長い作用を支える。我々の精神はこのような従順さに支えられて精力的に探求し長い間探求を続ける。いかなるも

のを探求するのであれ容易に発見し、明瞭に知覚し、誠実に判断し、そして長くその判断を保持する。[15]」

「スピリトゥス」(spiritus)とは、古代以来「医学者たちによって血液の蒸気、純粋かつ微細で、熱く澄んだものと定義され[16]」、魂と身体を媒介する、生物のすべての生命活動の活力の担い手とみなされている。そして画家にとっての画筆がそうであるように、「スピリトゥス」は、研究者にとっては精神的活動の「道具」なのである。とりわけこの「体液体」から生じる「スピリトゥス」は、脳の狭い通路において活発であることによって精神の探求的活動の持続可能にするのであるから。

以上のようにフィチーノは研究者の活動において黒胆汁の果たす役割を考察した上で、研究者の健康を損なう原因として粘液、黒胆汁、性交、満腹、朝の睡眠を挙げ、それらに対する対策を説明する。さらに後半の第十一章から第二四章では、黒胆汁の過剰を防ぎ四体液間の均衡を保持するための方法が具体的に記述されている。フィチーノは、シロップ、丸薬、舐剤といった様々な薬剤の処方や健康法を説明しているが、それらの記述はほとんど伝統的なものであり、それらの処方と、前半で説明されている理論との具体的な関係にはほとんど言及されておらず、羅列的な叙述にとどまっている。

四、占星術的医学へ向けて

前節で検討したフィチーノの黒胆汁に関する説明は、彼が伝統的な四体液理論を十分に理解し、自らの理論を構築していたことを示している。しかし「神聖な狂気」といわれるような才知的活動は、そのような伝統的な医学理論だけで十分な説明ができるだろうか。フィチーノによれば、「神聖な狂気」が通常の「狂気」とは質的に異なる決定的な要因が人間自身ではなく、天上界に見出されるのである。

水星は「万物探求の任務」を天上界において負っており、魂を探求の道程へと駆り立てる。[17]

さらに土星は

「すべての惑星の中で最高位にあり、探求者を最高位の事物まで導く。これより、とりわけ魂が外的な運動や自らの身体から引き離され、神的なものに近くそれらの道具として造られるときに、卓越した哲学者が生じるのである。それゆえに天上からの神的な流入物と神託によって満たされて、絶えず新奇なことを考案し未来を予告する。[18]」

よって我々人間が研究を行い、真理を見出すことができるのは、水星や土星といった惑星の導きがあるからに他ならない。そして「我々に学説を洞察するように促す水星と、我々に学説の洞察を続けて見出したものを保持させる土星がいくぶん冷たく乾いている[19]」ので、土星の性質を分有する黒胆汁は人間の魂にその特性を伝えるのである。これゆえ研究者は土星の性質すなわち冷と乾を分有し、憂鬱質となるが、しかし、この土星的な憂鬱さらには「神聖な狂気」によってのみ我々人間は「神的なもの」を理解し、神託を得ることが可能になるとも言えよう。よってこの惑星からの影響をいかに利用するかということは研究者にとって最も重要な点である。この天上界の影響を捉えるという問題は第三巻「天上的な生を得ることについて」の主題となっている。

我々の身体と宇宙との間には隠された対応関係があり、天上界とりわけ諸惑星の影響を制御することが身体の健康を保持あるいは回復するために必要であるという考えは古代・中世を通じて存在していた。たとえば瀉血などの処置をするのに適切な日時を星辰の位置から決定するための暦が作られていたし、また諸惑星と身体各部分との対応を示す図版も多く作られている。しかしこの占星術的医学を理論的考察の核心に置いて議論を進めたところにフィチーノの独自性がある。彼の名声とともに占星術的医学はルネサンス医学の表舞台に現れたのだった。

『生について』はイタリア内外で多くの版を重ねるとともに、独語、仏語、伊語といった俗語にも翻訳され、当時の思想界に大きな影響を与えた。その影響は、そこで説明されている具体的な処方もさることながら、むしろ黒胆汁の概念

を中心にした理論的考察によるものであった。本稿で検討したように、彼の理論は知識人にその任務の高貴性、神聖さを保証したのであり、それはルネサンスに特有な天才観の主要な理論的源泉となった。[20] さらに第一巻における精神的活動の高貴性の教説の哲学的基礎を構成していた占星術的医学の理論は、以後ペストや梅毒といった伝染病に関する理論的説明へも大きな影響を及ぼした。[21]

注

（1）フィチーノに関しては、以下の研究を参照。クリステラー『イタリア・ルネサンスの哲学者』佐藤三夫監訳、みすず書房、東京、一九九三。Kristeller, P. O.: The Philosophy of Marsilio Ficino. New York, 1943; Copenhaver, B. P. and Schmitt, C. B.: Renaissance Philosophy. 143-163, Oxford, 1992.

（2）現代の版としては以下のものがある。Ficino, M.: Three Books on Life. A Critical Edition and Translation by C. V. Kaske and J. R. Clark. Binghamton, New York, 1989（羅英対訳版）; Ficino, M.: De vita. a cura di A. Biondi e G. Pisani. Pordoenone, 1991（羅伊対訳版）. Consilio contro la pestilenza. a cura di E. Musacchio. Bologna, 1983.

（3）Galen: A Translation of Galen's Hygiene (De sanitate tuenda) by M. Green. 5, Springfield, Illinois, 1951.

（4）Avicenna: Liber canonis. 1 recto, 1507; Hildesheim, 1964. Cf. Cameron Gruner, O.: A treatise on the Canon of Medicine of Avicenna. 25, London, 1930.

（5）The School of Salernum. Regimen snitatis salerni. the English Version by Sir J. Harington, Salerno, 1953. Cf. Palmer, R.: Health, Hygiene and Longevity in Medieval and Renaissance Europe. 75-98 in Kawakita, Y. et al. (eds.): History of Hygiene. Tokyo, 1991; Wear, A.: The History of Personal Hygiene. 1283-1308 in Bynum, W. F. and Porter, R. (ed.): Companion Encyclopedia of the History of Medicine. London, 1993. シッパーゲス『中世の医学―治療と養生の文化史』一四五頁以下、大橋博司他訳、人文書院、京都、一九八八。

（6）Arano, L. C.: The Medieval Health Handbook: Tacuinum sanitatis. New York, 1976.

(7) シッパーゲス『中世の医学』二六一～二六二頁参照。 Cf. Arano, L. C. : The Medieval Health Handbook. plates 93-95.

(8) Rather, L. J. : The "Six Things Non-natural" : A Note on the Origins and Fate of a Doctrine and a Phrase. Clio Medica. 3 : 337-347, 1968.

(9) Maurach, V. G. : Johannicius Isagoge ad Techne Galeni. Sudhoffs Archiv. 62 : 148-174, 1978 ; Joannitius : Isagoge. Tr. by H. P. Cholmeley. 705-715 in A Source Book in Medieval Science. Cambridge, Mass., 1974.

(10) 体液論と憂鬱質の関係に関しては、クリバンスキー・パノフスキー・ザクスル『土星とメランコリー』田中英道監訳、晶文社、東京、一九九一。また癲癇に関しては、テムキン『てんかんの歴史1』和田豊治訳、中央洋書出版部、東京、一九八八。

(11) "Illa quidem ingenium saepe obtundit et suffocat, haec vero, ... assidua cura crebrisque deliramentis vexat animum iudiciumque perturbat" : Ficino: Three Books on Life. Cap.3 ; p. 112.

(12) Ibid. Cap. 5 ; p. 116. クリバンスキー他『土星とメランコリー』二二五頁以降および 若桑みどり『イメージを読む』筑摩書房、東京、一九九三。

(13) "Melancholia, id est atra bilis, est duplex: altera quidem naturalis a medicis appellatur, altera vero adustione contingit. Naturalis illa nihil est aliud quam densior quaedam sicciorque pars sanguinis. Adusta vero in species quattuor distribuitur: aut enim naturalis melancholiae aut sanguinis purioris aut bilis aut salsae pituitae combustione concipitur. Quaecunque adustione nascitur iudicio et sapientiae nocet." : Ficino : Three Books on Life. Cap. 5 ; p. 116.

(14) Ibid. Cap. 5 ; p. 116-118.

(15) "spiritus ex hoc humore creati primo quidem subtiles sunt, non aliter quam aqua illa quam et vitae seu vitis aquam nominant et ardentem, quotiens ex crassiori mero quadam ad ignem destillatione, ut fieri solet, exprimitur. Spritus enim sub angustioribus atrae bilis eiusmodi compressi meatibus vehementiore ob unitatem calore maxime

tenuantur, perque arctiores meatus expressi subtiliores erumpunt; deinde calidiores similiter atque eadem ratione lucidiores; tertio motu agiles, actione vehementissimi; quarto solido stabilique humore iugiter emanantes actioni diutissme serviunt. Tali autem animus noster obsequio fretus indagat vehementer, perseverat investigando diutius. Facilius quaecunque investigaverit, invenit, clare perspicit, sincere diiudicat, ac diu retinet iudicata." : Ibid. Cap. 6 ; p. 120.

(16) "qui apud medicos vapor quidam sanguinis purus, subtilis, calidus et lucidus definitur." : Ibid. Cap. 2 ; p. 110. 「スピリトゥス」は、フィチーノの魔術理論において最も重要な概念である。伊藤和行「混沌たる自然―ルネサンスの魔術的自然観―」『理想』六四九号、三四～四三頁、一九九二、およびウォーカー『ルネサンスの魔術思想―フィチーノからカンパネッラへ』田口清一訳、平凡社、東京、一九九三を参照。

(17) Ibid. Cap.1 ; p. 108.

(18) "altissimus omnium planetarum, investigantem evehit ad altissima. Hinc philosophi singulares evadunt, praesertim cum animus sic ab externis motibus atque corpore proprio sevocatus, et quam proximus divinis et divinorum instrumentum efficiatur. Unde divinis influxibus oraculisque ex alto repletus, nova quaedam inusitataque semper excogitat et futura praedicit." : Ibid. Cap.6 ; p. 120-122.

(19) "Mercurius, qui ut doctrinas investigemus invitat, et Saturnus qui efficit ut in doctrinis investigandis perseveremus inventasque servemus, frigidi quodammodo siccique ab astronomis esse" : Ibid. Cap. 4 ; p. 112.

(20) ルネサンスにおける芸術家の天才観については、ウィットコウアー『数奇な芸術家たち―土星のもとに生まれて―』二一七～三一八頁、中森義宗・清水忠共訳、岩崎美術社、東京、一九六九を参照。

(21) Cf. Nutton, V. : The Seeds of Disease : An Explanation of Contagion and Infection, from the Greeks to the Renaissance. Medical History. 27 : 1-34, 1983.

（東京家政学院大学）

Marsilio Ficino's Theory on Health

by Kazuyuki ITO

Marsilio Ficino, the most important philosopher of the Italian Renaissance, wrote a medical book "De vita". Its first part deals with the health of those who devote themselves to literary studies. On the basis of Galenian humoralism, Ficino argues that learned people or scholars are prone to phlegm and black bile. The excesses of them bring sickness, and particularly the excesses of black bile make scholars melancholic. Therefore they must be careful about the balance of humors.

Ficino states that the insanity brought by black bile is 'divine madness', necessary to genial works. He finds the elements, which make 'sacred madness' different in quality from general madness, under the influence of the celestial world. We can find the truth by the guidance of Saturn. Black bile participates in the Saturnian quality : cold and dry, and transmits the characteristic of Saturn to us. We can understand the 'divine things' only by the Saturnian melancholy. Therefore the influence of planets is very important for the activity of scholars.

Through "De vita", astrological medicine - which attributes the causes of disease to the celestial world - had a great influence on Renaissance thought, and made an important contribution to the theoretical explanation of epidemic diseases like pestilence and syphilis. Ficino's theory certified the nobility and divinity of the duties of intellectuals, and was the main theoretical source of the Renaissance characteristic view of genius.